

檜沢城

ひざわじょう

美和の中世城郭

茨城県常陸大宮市下檜沢



『美和の中世城郭 一檜沢城一』

編集 山川千博(常陸大宮市史編さん委員会古代中世史部会)
発行 森と地域の調和を考える会(代表 龍崎眞一)
イラスト 河西和文
デザイン 大高泰弘
印刷所 株式会社タイム
発行日 令和元年(2019)10月1日

森と地域の調和を考える会
(木の駅プロジェクト美和実行委員会)

美和の中世城郭 檜沢城

ひざわじょう

一、檜沢城跡の整備事業

近年、茨城県常陸大宮市美和地域（旧美和村）では、市民を中心に「森と地域の調和を考える会〔木の駅プロジェクト美和実行委員会〕」が発足し、地域に所在する中世城館跡を活用するための、調査整備事業を進めています。

すでに平成二六・七年度には高部地区に所在する高部館跡・高部向館跡の、二八年度には鷲子地区の河内館跡・河内向館跡の、二九年度には小田野地区の小田野城跡の草刈り整備をそれぞれ実施しました。その結果、各城館跡では数百年ものあいだ草に埋もれていた地表遺構が姿を現し、城の全体像が浮かび上がりました。毎年整備後には、茨城大学中世史研究会・茨城城郭研究会・常陸大宮市史編さん委員会等の協力を得て縄張調査を行い、遺構を記録するようにつとめています。またその成果を、毎年、山城ツアーやパンフレットの刊行等により広く公開・周知し、美和地域の文化振興に役立てています。

平成三〇年度は、檜沢地区の檜沢城跡を対象に活動しました。一月には、茨城県の補助を受けた「身近なみどり整備推進事業」により一・四一haの竹林整備を実施し、二月には、地区住民約五〇名とともに城内の草刈り・順路整備に取り組みました。そして三月一〇日には、「茨城城郭研究会・常陸大宮市浪漫文化街並みづくり事業」との共催で山城ツアーを開催し、市内外から集まっ

た約一〇〇名の参加者が、汗を流しながら檜沢城跡の迫力ある遺構を見学しました。

本書は、ツアー当日の配布資料を基に再構成し、檜沢城跡とその周辺文化遺産を紹介するためのパンフレットとして、常陸大宮市史編さん委員会古代中世史部会が作成し、森と地域の調和を考える会が刊行するものです。

本書の構成は以下の通りです。

- 一、檜沢城跡の整備事業 1頁
- 二、檜沢城の歴史―城主檜沢氏・小室氏について― 3頁
- 三、檜沢城と周辺城館群 5頁
- 四、檜沢城ゆかりの文化財 7頁
- 五、「森と地域の調和を考える会」の取り組み 10頁
- 付録、檜沢城関連史料集 11頁

執筆は、一・五を龍崎眞一（森と地域の調和を考える会）、二を森木悠介（常陸大宮市史編さん委員会古代中世史部会）、三を高橋宏和（茨城城郭研究会）、四を中林香澄（常陸大宮市教育委員会）が担当し、編集を山川千博（常陸大宮市史編さん委員会古代中世史部会）が行いました。

檜沢城の整備（二〇一九年二月二十三日）



檜沢城ツアー（二〇一九年三月十日）



檜沢の宿を望む

主郭で檜沢城の歴史に耳を傾ける

横堀を越える

根小屋



2 ツアー出発前、美和工芸ふれあいセンターで



二重堀切を登る



二、檜沢城の歴史―城主檜沢氏・小室氏について―

檜澤氏と小室氏は常陸佐竹氏の一族です。どちらも檜沢城主であったという伝承を持っています。ここでは、中世における両氏の動向をたどりつつ檜沢城の歴史に触れたいと思います。

檜沢氏の成立

鎌倉時代、佐竹義胤の五男景義が高部（常陸大宮市）に居を構え、高部氏の祖となりました。さらに景義の次男成義が、東隣の檜沢（同上）に入部することとなり、檜沢氏が成立しました。【系図1】は高部氏・檜沢氏の略系図です。ただ、同時代史料と符合しない点も多く、高部氏・檜沢氏は謎が多い氏族です。そのため、成立期から南北朝・室町初期の檜沢氏の動向はほとんどわかっていません。

小室氏の成立

小室氏は佐竹義盛の弟粟義有の次男宗胤を祖とする家系と伝わります（「佐竹譜代記録」）。ただ、佐竹一族酒出氏の分流（「康応記録」）、山入佐竹氏の一族依上氏の子孫（【系図4】の対馬守系小室氏作成「元禄家伝文書」）とも伝わります。佐竹一族の出であることは間違いありませんが、小室氏の出身地は不明です。小室氏には複数の家系がいたことが確認でき（【系図2・5】）、その中で檜沢地域と関わりがあったのは【系図5】の相模守系小室氏です。また、天文八年（一五三九）や天文十七年（一五四八）の高部の諏訪神社棟札に「小室新三郎宗次」「小室丹後守宗貞」「小室丹後守 対馬守」の名が確認でき、【系図3・4】の丹後守・対馬守系小室氏も高部・檜沢地域と関わりがあったことが窺えます。

佐竹の乱

佐竹の乱は応永十四年（一四〇七）に佐竹義盛の後継問題から始まった、佐竹本宗家と山入佐竹氏ら一族・国人間の抗争です。山入佐竹氏は他家からの養子である本宗家の義憲（義人）に対し、義盛の弟粟義有を立てて反抗しました。正長元年（一四二八）には檜沢助次郎や高部三郎らが山入佐竹祐義らとともに野口

を変えました。永正十七年（一五二〇）の諏訪神社棟札には「高部駿河守義広」「檜沢越後守義定」が名を連ねているので、檜沢氏の高部改姓はそれ以降でしょう。義定の孫義直の頃とされています。以後、武士としての高部氏は檜沢氏のことです。

檜沢衆の活躍

戦国中期には「檜沢衆」が編成されました。元龜三年（一五七二）の檜沢村満福寺薬師堂棟札写（「水府志料三五」）に名を連ねている長山、安崎、高部、小室、長岡、平塚、岡崎、成井、諸沢氏が「檜沢衆」の中核であったと考えられます。「檜沢衆」は、天文九年（一五四〇）頃、隣国下野の那須氏の内乱に那須政資方への援軍として常陸大宮地域の武士たちとともに派遣され、元龜年間（一五七〇―一）にも対那須氏のために松野城（栃木県那珂川町）へ番手として派遣されました（「大縄久照文書」「松野文書」）。こうした史料から、佐竹氏が南奥（福島県域）・下野東部・常陸南部へ勢力を拡大する中で、「檜沢衆」が佐竹氏や東家に従って各方面に動員されたことが想像できます。

城（常陸大宮市）に籠城しました。しかし、本宗家方の大山氏らに敗れ、檜沢助次郎は討たれてしまいました。こうして没落を余儀なくされた檜沢氏は、流浪した後、佐竹本宗家に仕えたと伝えられています（「鳥名木文書」「秋田藩家蔵文書七」「伝記」）。系図の混乱は、こうした出来事に起因しているのでしょうか。

その後、相模守系小室氏が檜沢城主になったと考えられます。

佐竹の乱終結

延徳二年（一四九〇）、佐竹義舜が山入佐竹義藤・氏義により太田城（常陸太田市）から追放されました。明応二年（一四九三）前後、義舜が檜沢城を攻めることが取り沙汰されており（「秋田藩家蔵文書十」）、この時点での相模守系小室氏は山入佐竹氏方だったと思われる。明応の和議後、山入佐竹氏は孤立していき、明応九年（一五〇〇）には義舜が金砂山城（常陸太田市）に籠城して、山入佐竹氏に対抗しました。その際、義舜に味方した小室相模守は檜沢城に、高部駿河守は高部城に籠って山入佐竹氏の軍勢と戦ったものの、檜沢城・高部城は落城したと伝えられています（「小室武雅由緒届書」「高部氏系図」）。

永正元年（一五〇四）（文龜二年とも）、義舜は太田城を奪回し、さらに山入佐竹氏を滅ぼして百年続いた佐竹の乱に終止符を打ちました。乱後、檜沢氏と相模守系小室氏は義舜の弟政義が創始した佐竹東家に仕えました。また、檜沢氏の本家である高部氏が高部諏訪神社の神官となったため、檜沢氏は高部氏に名乗り

秋田転封

天正十八年（一五九〇）に豊臣秀吉が天下を統一すると、佐竹氏は領内再編に着手しました。佐竹東家は鹿嶋郡等に知行を与えられ、佐竹東家の本領になっていた檜沢・高部地域は佐竹義宣の蔵入地（直轄領）に編入されました。

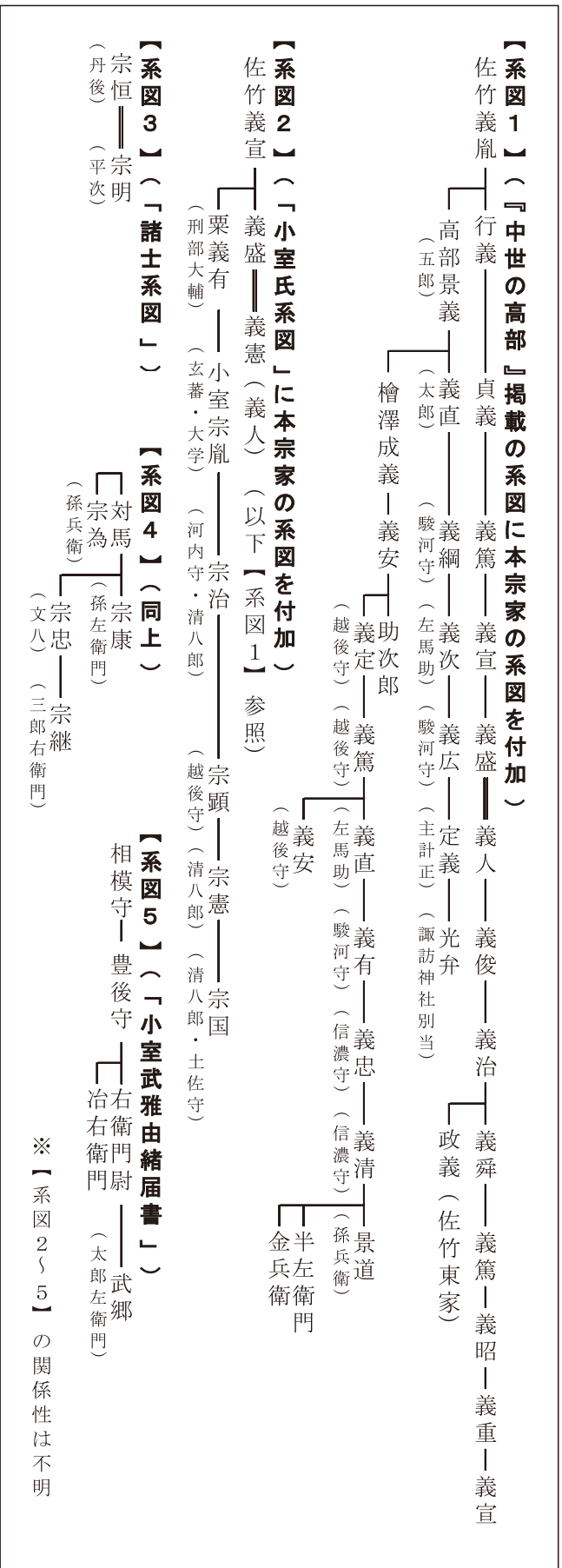
慶長七年（一六〇二）、関ヶ原合戦での対応を誤った佐竹氏は秋田へ転封となりました。その際、家臣団は秋田同行、帰農、他家仕官などさまざまな選択を迫られました。高部氏（旧檜沢氏）・相模守系小室氏の場合は、高部景道・小室武郷が秋田へ赴き、高部金兵衛・小室治右衛門の家系が檜沢に残ることとなりました（「小室武雅由緒届書」「高部氏系図」）。



居館跡から檜沢宿を望む



左奥が檜沢古館、中央が檜沢城



三、檜沢城と周辺城郭群

檜沢・上檜沢地内では、檜沢宿のある谷筋を守るように、檜沢城をはじめとし、多くの城郭群が配されています。

檜沢古館・上檜沢館・氷之沢館・下檜沢向館は、遺構の様子からおそらく同時代に築かれた砦と思われる、十五世紀の佐竹の乱の時期に檜沢氏や小室氏等が守っていたのでしょう。乱の終結後、これらの城郭は役目を終えたと思われるですが、徐々に勢力を伸ばしてきた上那須氏に対する監視所として再機能するも、永正一三年の宇都宮氏の侵攻によりほとんどが落城したと思われます。後に当主となった佐竹義篤は、領内防衛の再構成を図り、新たな拠点・軍勢駐屯地の必要性から市内各所に新規築城し、そのうちの一つが檜沢城だったと考えられます。檜沢城に関する地元の伝承が無いのは、築城目的が地域支配ではなく軍事的な理由だったからと思われる。



◆上檜沢館

上檜沢の満福寺の北約六〇〇mの頂上には、約三〇m×約一〇mの楕円形状の郭と堀切や帯曲輪で構成された上檜沢館があります。構造は檜沢古館とほぼ同じで、ユウガイという別名があります。

◆檜沢城

下檜沢宿の西側にある檜沢城は、宿との比高約一〇〇mの頂上に主郭を置く山城で、南側と東側に曲輪群を配置しています。曲輪間の切岸や主郭背後にある幅約四m、深さ約二mの二重堀切、宿の付近まで展開する居館跡など、その遺構の規模や鋭さは長い年月を経た現在でも殺気を放ち、風化を感じさせません。

◆檜沢古館

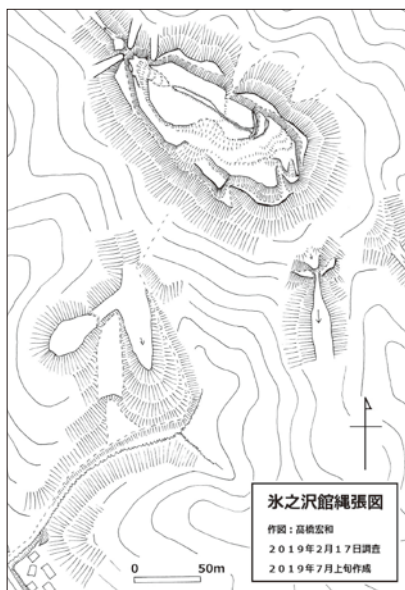
檜沢城の尾根続き、更に西側の標高二九一mの頂上には檜沢古館があります。構造は、直径約一五mの円形状の単郭に、幅・深さとも約二mの堀切を設けており、檜沢城より古い時代の遺構と思われる。現在、麓の集落では、檜沢城ではなくこの古館のみが城跡として伝わっています。

◆下檜沢向館

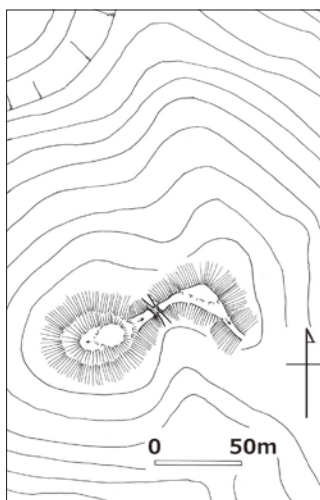
檜沢古館から南東に約一・五km、下郷コミュニティセンター東の頂上には、幅約二m、深さ約一mの堀切遺構のみの簡素な物見台である、下檜沢向館があります。

◆氷之沢館

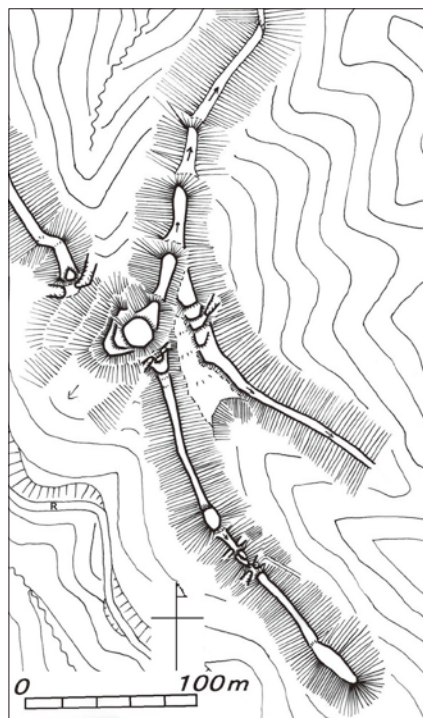
檜沢古館から南に約七五〇mの山頂にあり、鎌倉期に三浦義隆が居住したとされていますが、広さ約一三〇m×約四〇mの郭や幅約四m×深さ約二mの堀切といった遺構が残ることから、戦国初期の城郭だと思われる。



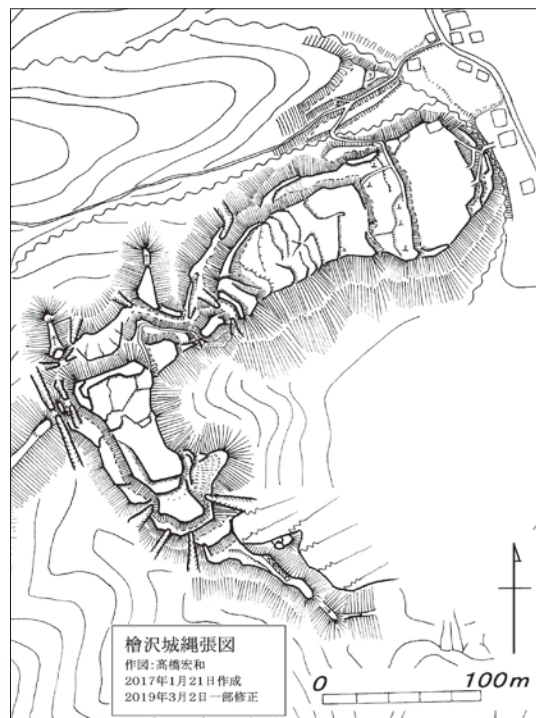
氷之沢館縄張図



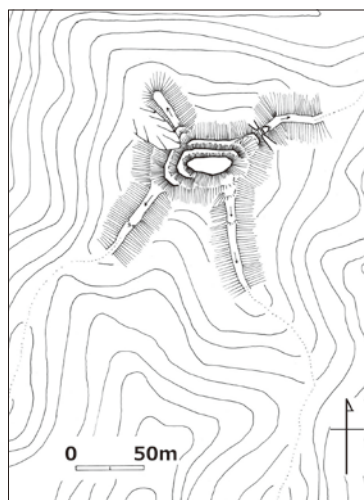
下檜沢向館縄張図



檜沢古館縄張図



檜沢城縄張図



上檜沢館縄張図



檜沢城尾根



檜沢城館北横堀



檜沢城二重堀

四、檜沢城ゆかりの文化財

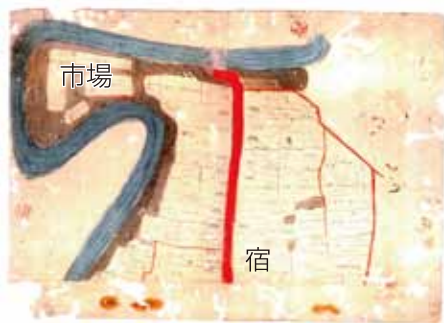
下檜沢村絵図

下檜沢の個人宅に、江戸時代に描かれた下檜沢村絵図が伝わり、かつての檜沢城周辺の様子を知らることが出来ます。絵図を基に、江戸時代の街道・河道・地名などを追うと、下図のとおり復元できます。当時緒川は、西に大きく蛇行して檜沢城のすぐ東下を流れていたことがわかります。



下檜沢宿

檜沢城の東麓、緒川の対岸に檜沢宿が展開します。宿は北・西・南を緒川に囲み守られ、その内側に鹿嶋神社や太山寺をはじめとする宗教施設を持ちます。宿内を南北に古道が通過し、北の出口の外側、字「館」付近では、檜沢城の縄張が古道を塞ぐように東へ大きくせり出しており、城が宿へと続く渡河地点を守っていたと考えられます。



このように檜沢宿は、緒川と檜沢城に守られる構造にあることから、檜沢城の城下のような位置づけができるかもしれません。

また、緒川の氾濫原には「市場」の字名があり、当時は臨時の市が立てられたと推測されます。

鹿嶋神社

文永年間に創建され、永正十一年（一五一四）に佐竹義舜が再興したとされます。その後何度か改造



鹿嶋神社境内

修理され、現在の姿は寛政二年（一七九〇）に模様替えされたものです。本殿は市指定文化財になっています。

宿から南に2kmほどの場所にある氷之沢の鹿嶋神社も、永正十一年に佐竹義舜が再興したという社伝があるため、元は同じ神社であった可能性がります。

満福寺と浄因寺

現在上檜沢にある満福寺は、元は下檜沢の宿の南のはずれにあり、現在の満福寺の場所には浄因寺がありました。浄因寺が江戸時代に廃寺になったため、満福寺が現在地へと移りました。満福寺の開山は享徳三年（一四五四）で、浄因寺の開山は享徳三年（一四五四）で、どちらも太山寺と同じく真言宗の寺院です。現在の満福寺にある薬師堂山門（市指定文化財）は、近世以前の建築で、浄因寺がそれ以前の寺院に由来するものと考えられます。



満福寺薬師堂山門

太山寺跡

真言宗の寺院として、応永元年（一三九四）に建立されました。十六世紀に住職が小室氏に当てた祈願状が残されていたことから、小室氏の祈願寺であったことがわかります。現在は廃寺ですが、旧境内地である山林内には碑塔類が散見され、本堂等の塔頭があつたと考えられる平場も残り、寺院の名残が感じられます。



太山寺跡

十二所神社

現在宿の北西にある十二所神社は、天喜康平（一〇五三・六四）の創立とされます。元々どこにあつた



現在の十二所神社

のかは不明ですが、宝徳年間（一四四九・五一）の火災により文書等が焼失したとされています。寛文六年（二六六六）の破却後に、一度太山寺境内へと移り、その後、明治六年（一八七二）に現在地へと遷座しました。

高部諏訪神社社殿造営棟札



16世紀代の社殿造営棟札2点(高部諏訪神社蔵)

檜沢地区の西方、高部地区の諏訪神社には古い棟札が多く残されています。写真右は永正十七年（一五二〇）の社殿造営時のもので、大檀那に高部駿河守義廣と檜澤越後守義定の名があります。写真左の天文八年（一五三九）のものには、大檀那の一人として小室新三良宗次の名と、「義篤御代也小室丹後守宗貞」の記載があります。これらの事から、高部諏訪神社が檜沢周辺の有力者からも信仰を集めていたことが伺えます。

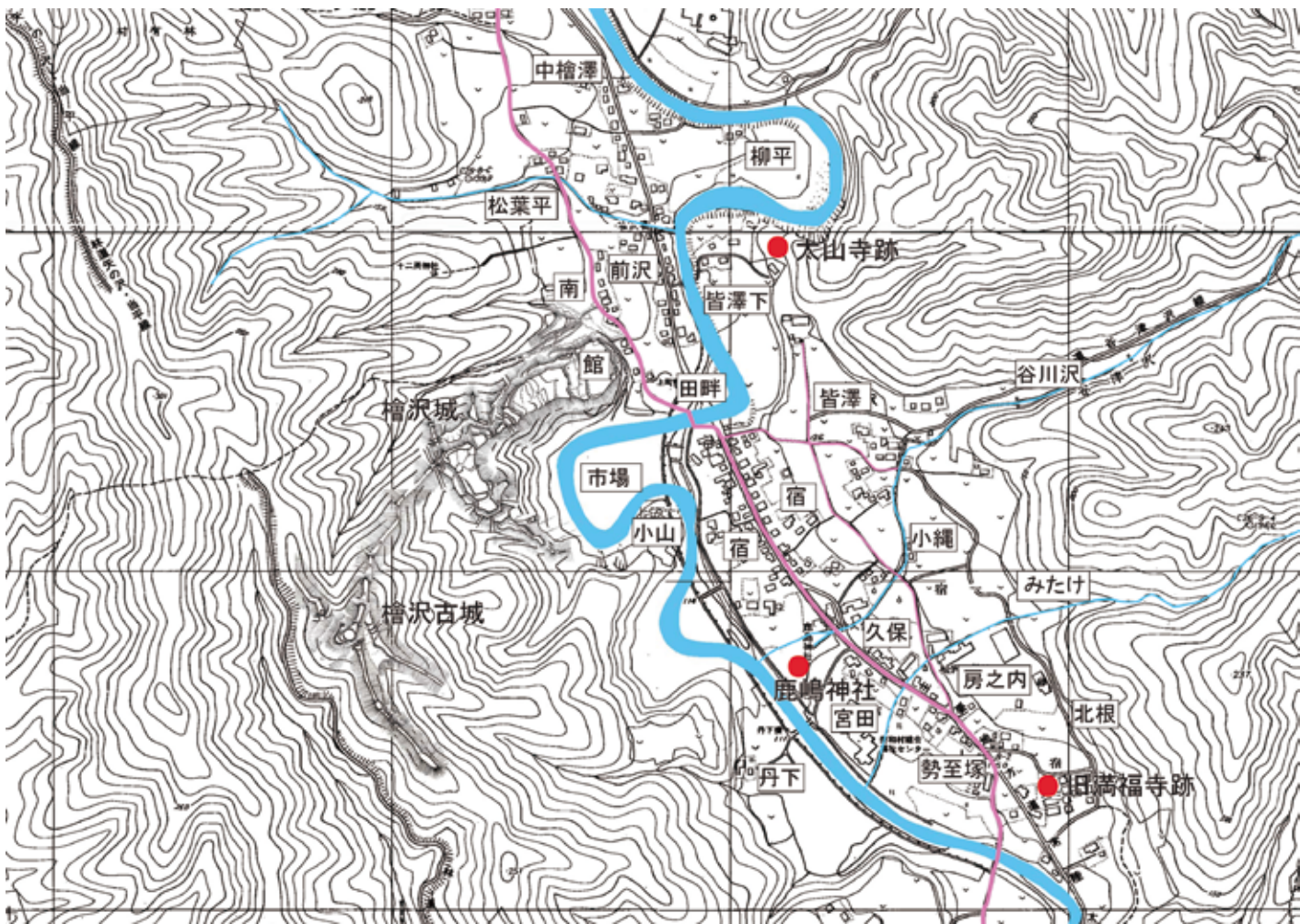
氷之沢の宝篋印塔



宝篋印塔(氷之沢地区)

檜沢城の西麓には氷之沢の集落があり、この地区の個人宅に宝篋印塔が残されています。宝篋印塔は五輪塔と同じく昔の供養塔で、武家や僧侶などの身分のある人のものであると考えられています。

この宝篋印塔は、形式から見て十五世紀頃のもので、檜沢城や氷之沢館に関係する可能性があります。昭和五〇年代までは旧道沿いに立っていたと云われています。



檜沢城周辺図(原図 1:5000 ●●● 平成 ●●● 発行)

五、森と地域の調和を考える会の取り組み

平成二四年四月、美和地域の衰退に危機感を持ち、「森と地域の調和を考える会」（以下「当会」）を結成しました。それ以来、「地域主体（地域の力）による地域活性化」を目標に掲げ、さまざまな活動に取り組んでおります。

当会の活動コンセプトは、「地域資源を活かした地域活性化」です。この地域にある豊かな自然や日本の原風景里山、地域に残る歴史的価値遺産などを、地域特有の宝と位置づけ、またそれらを活用し、過疎地域の活性化を目指しています。

これまでの活動では、①森林資源を利活用し、森林荒廃対策と商店活性化を図る「木の駅プロジェクト美和」を中心に、②広葉樹を活用した「美和の薪」製造販売事業、③子どもたちへの森林教室、④地域内の古い町並みの保存事業、⑤地域の魅力を発掘・発信する「お宝マップ美和」制作事業、⑥中世山城の整備事業と、さまざまな事業・イベントを実施して参りました。

なかでも本書に関わる⑥では、当地域に点在する七つの山城と四つの向館の遺構を、未来に継承する文化遺産（宝もの）として位置づけ、平成二五年六月から活動を継続しています。今年度は、あらたに檜沢城跡を整備し、戦国時代の風景が残る貴重な地域を紹介するため、本書「美和の中世城郭―檜沢城―」を作製しました。当会の諸事業を通じて、地元の方々が、自分たちの暮らすこの場所の歴史的価値を見直し、また地域外の方々にも、この地域に関心を持っていただく機会になれば幸いですと考えています。



③ 森林教室(間伐体験) / 美和小学校



② 薪製造販売事業



① 木の駅プロジェクト美和



⑥ 中世城郭整備事業



⑤ 歴史探索ツアー



④ 岡山邸庭園(養浩園)整備

森と地域の調和を考える会

龍崎 眞一 川野 和彦 大森 豊 堀江 克己 河西 和文 薄井 均 清水 浩 大高 泰弘

【主要参考文献】

- ・青木義一「氷の沢館」（茨城城郭研究会編『続 図説茨城の城郭』(国書刊行会、二〇一七年)
- ・佐々木倫朗『戦国期権力佐竹氏の研究』（思文閣出版、二〇一一年）
- ・高橋宏和『檜沢城砦群』（茨城城郭研究会編『続 図説茨城の城郭』(国書刊行会、二〇一七年)
- ・比毛君男「中世の石造物調査―新たな発見―」（『広報 常陸大宮 No.170』二〇一八年）
- ・常陸大宮市文書館『常陸大宮の棟札2』（常陸大宮市教育委員会、二〇一八年）
- ・美和村史編さん委員会編『美和村史』（美和村、一九九三年）
- ・美和村史編さん委員会編『美和村史料 近世村絵図』（美和村、一九九六年）
- ・山川千博編『中世の高部―戦国時代の山城高部館・向館、そして城下を受け継ぐ高部宿の姿を探る』（森と地域の調和を考える会、二〇一六年）
- ・山川千博「東国の戦乱と佐竹の乱―室町期の常陸大宮を探る」（『常陸大宮市文書館報』四、二〇一八年）

【協力者一覧】(敬称略)

- 五十嵐雄大 石井聖子 小室取 小室彬 須貝慎吾 高橋修 高橋拓也 高村恵美
- 茨城城郭研究会 茨城大学中世史研究会 常陸大宮市文書館 高部諏訪神社 下檜沢一区・二区自治会

付録：檜沢城関連史料集

【史料一】正長元年 八月十八日付足利持氏御教書（『秋田藩家蔵文書七』）

「足利右兵衛督持氏卿書」 「大山弥大夫義次」

討捕高久右馬助入道・檜澤助次郎等之由、里見刑部少輔所注申也、尤以神妙、弥可勵戦功之状、如件

正長元年八月十八日

持氏（花押影）

佐竹因幡入道殿

【史料二】(年末詳) 十二月廿七日付某起請文写（『秋田藩家蔵文書一〇』）

「前二同」

條々申定題目

- 一 祝言以前、太田へ自身可有出仕事、
- 一 所帯返之事者、相互義たるべき事、
- 一 祝言翌日に氏義手切事、其上において、京兆（京兆）ひびきへ御動候者、同心にはたらきをなさるべき事、
- 一 其方無越度うへに、京兆御等閑義候者、無二其方可致同心事、
- 一 二段御望義、涯分可被相付当方候、萬一其義無御信用候者、其方無餘義可申談事、

右、條々若偽候者、神名如常候、

十二月廿七日

「右、古キ写ナリ」

【史料三】永正十七年五月廿日高部諏訪神社殿造營棟札（『常陸大宮の棟札2』）

聖主中天	大行事帝釈天	守護四天王	大檀那	高部駿河守義廣
封二種	今日阿弥陀如来	當住持大阿闍梨權大僧都有真	遷宮	檜澤越後守義定
迦陵頻伽聲	碑喻文殊師利弁	同柱立		
戒師釈迦牟尼如来	永正十七年	辛	五月廿日修造訖	
哀愍衆生者	證誠大梵天王			
封之中	貴賤道俗之以助力造營			
我等今敬礼	諸行事戒行事觀世音弁	當守護龍神八部	勸進沙門	伊王野道敏
			同純樞道祐	
			大工長山木工権助	

（裏）

御遷宮ニ入物、弓二張、布二代、両社二三百文「一」米二升、扇二本、帯二スチ、紙二帖、麻二括、馬一疋ノ分ニ代三百文、鍛冶ノ祝ナニカナシ代二百文出ソロ義廣 一貫文合力

御料内命婦造營ノ合力五百文也、亮弁僧都時代五百文合力申候、少キ由被申候ヲ傍々ノ訴訟ヲ以テ取候、為ニ未代ノ書付置也

【史料四】(天文九年方) 四月二五日付佐竹義篤書状（『大縄久照文書』）

鳥山へ□□（以切）紙申届候、其口之者被申付、為飛脚彼一書今晩鳥山へ可被相届候、然者廿九日ニ番衆可指越候、先初番ニハ野口・東野・高部・小舟之者共可遣候、催作可然候、出入十一日□□度尤候、野口・東野□□自是可申付候、又次番者小瀬・樹洞（樹洞）の可為衆候、自只今催作尤候、何も悉可遣候、高部・小舟之者一向ふせう（不肖）の者とも迄、不殘可被申付候、御□二候共、番頭と□其方被越候者□可申候、明日・明後日之間被打掃談合可然候、恐々謹言

四月廿五日

義篤（花押）

【史料五】元龜三年十月八日檜沢満福寺薬師堂棟札写（『水府志料三五』）

元龜三年壬申十月八日	大縄左京亮殿
新造薬師如来	本願白雲上人
別当権大僧都法印有恵	
長山対馬殿	
安崎丹後守殿	
高部左馬助殿	
小室信濃殿	
長岡ちからの助殿	
平塚隼人助殿	